

(紹介)

フランスの展示工学研究所と博物館学研究センター

CNRSアトリエベルビューとラ・ビレット

Atelier d'Exploration Bellevue et la Cité des Sciences et de l'Industrie

水嶋英治

Eiji Mizushima

日本流にえば「展示工学研究所」ともいうべきアトリエがパリの郊外の小さな街ベルビューにある。モンパルナスから電車でおよそ40分、ロダンのアトリエがあったこの地にフランス国立科学研究センターのAtelier d'Exploration Bellevueがある。ベルビューとは文字通り美しい眺めであり、ゆるやかな丘陵地帯にある研究所からパリ市街を眺めると、パリの町並みを遠くに全貌することができる。「科学博物館のための博物館学」の実践部門としてこの開発アトリエでは、小規模ながら多くの研究と展示物の開発、制作の実績を残している。

■CNRS (Centre National de la Recherche Scientifique)

まずはじめに、基礎研究に関しては他国の例を見ないフランスの研究機関CNRS(国立科学研究センター)について言及しておかなければならない。

CNRSは研究者10,000人、研究技師10,000人、管理事務関係者5,000人からなる巨大組織である。全員国家公務員扱いであり、研究の選択、進め方は完全な自由が与えられている。

CNRSの研究所総数1300(うち900は大学関係、400はCNRS直轄)は判定会議によってその研究展開の評価を受ける。CNRSに当てられた1987年度の予算は90億フランであった。

ベルビューのアトリエには約10人の研究者がおり、ラ・ビレットや発見宮殿(Palais de la Découverte)のような科学博物館から依頼された新展示の開発を行っている。アメリカのエクスプロアトリウム展示の開発はあまりにも有名であるが、ここはエ

クスプロアトリウムのフランス版である。

■ラ・ビレット博物館学研究センター

パリの北東に1986年開館したラ・ビレット(科学都市)には2つの研究センターがある。ひとつは科学技術史研究センターであり、もうひとつは博物館学研究センターである。初代館長レヴィはサイエンスセンターの器と、ハードウェアとしての展示だけを完成させただけではなかった。同時平行的にひとつの学問を体系化しようとする野心的な試みも行ったのである。

ラ・ビレット建設プロジェクトの進行時に収集した資料は膨大な量に及んでいたが、美術館や歴史博物館に博物館学があるように、科学博物館のためにも同様な理論体系があってしかるべきだ、とプロジェクトに参画した人々は考えはじめた。この議論は数年続き、最終的には博物館学研究センターが設置された。現在では、パリ第7大学と提携して「科学博物館のための博物館学」を整備体系化する研究が進行中である。

最近注目されるのは、CNRSと協力して発展途上国のサイエンスセンター建設プロジェクトに対し、ノウハウとその技術を海外に輸出するなど新たな活動を国際レベルで展開している点である。

■3機関共同の基本方針

本来、理論としての研究を目的とする機関と工学的な応用を目的とする機関が協力しあう必然性は、自然に発生してくるものではない。協力しやすい状況や関係と組織を特別に設置する必要がある。フラ

ンスでは科学技術振興を図るため、異なる組織間の共同研究が実施されているが、その基本方針はいくつかあげることができる(注)。

- ① 公的研究所内に、混合研究班を増やす
- ② 大学、企業間の契約を増やす
- ③ 研究者の異動を促進する
- ④ 混合組織をもって協力する
- ⑤ 研究所に対して融資の優先権を与える

ねらいは、優先すべきテーマに一致協力して取り組む体制をとりやすくすることにある。

ラ・ビレットとCNRS、パリ第7大学の場合も上記の基本方針によるところが大きい。非常に大雑把であるが、簡略化して3機関の役割を述べれば、次のように言うことができる。

① ある特定のトピック・テーマの選定、その知識構造の究明、どのように難解な情報を市民に咀嚼して表現するか、またそのメディア化の研究を大学でおこなう。

② 展示をどのように表現するか、展示手法を開発し、研究所内部で製作する。またその展示物の工学的損面からの分析・評価をCNRSのアトリエ・ベルビューでおこなう。

③ ラ・ビレットでは、博物館学研究センターが中心となって、上記2機関の担当者と共に、常設展示やシテ・デ・ザンファン(こども広場など)で展示し、総合評価を行なう。

■研究の中心人物

3機関共同とは言え、やはり、組織を動かしているのは人間である。このミュージオロジー・シアンティフィックの中心人物は、CNTS科学技術情報局長のG. デラコート、(現在はアメリカのエクスプロアトリウム館長)ベルビュー展示開発アトリエのアンヌ・M. アントニー博士、第7大学とラ・ビレットの科学顧問J.P.ナタリである。アントニーに科学博物館の博物館学についていかにあるべきかとインタビューしたところ、「博物館学はそれぞれの専門分野の寄せ集めではなく、知識体系論的architectoniqueに構築されなければならない」と主張していたのが印象的であった。(architectoniqueとは展示に対応させて、建築の構造のように体系的という意味)

■結語

我が国には伝統的な博物館学さえ市民権を得ていない感があるが、ましてや「科学的」な博物館となると、フランスにおいてさえ伝統的な学とは思想上の衝突がある。

新しい学問の形成は、長い歴史が物語るように、しばしば迫害を受ける。この学問の起こりは、世界的規模を誇るラ・ビレット「科学技術産業博物館」建設の国家プロジェクトにまでさかのぼる。歴史が浅いばかりではなく、フランス国内にも「科学博物館のための博物館学」を認める人々は多くない。

確かに、Museologie Scientifiqueはその思想においては挑戦的であり実験的であっても、科学研究方法による博物館学の探求というよりも、まだ現段階では科学博物館のための博物館学という二義的な意味あいが強いと感じられる。

それは博物館学は「学」として成立しうるかという哲学的問題が背景に潜んでいるからであろう。

何をもって「学」というか……CNRSの研究者はこの問いの後に次のように言うのである。「学」というからにはその方法論あるいはアプローチがあるはずであり、その学問的枠組みが明確になっていなければならない……」と。

しかし、「科学博物館論や展示の開発はarchitectoniqueと成りうる、つまりlogieとして体系化される可能性が十分にある『学』である」という意識がある。

だが、フランスは「革命の国」でもある。革新的な思想や学問もその立場を容易に得ることができるのか、大学にも堂々とその講義が行われている。

この「学」の分析視点や体系づけ、あるいは問題そのものの設定に多くの時間を要するであろうが、今後、わが国の科学系・理工系の博物館とってみても、新興のミュージオロジー・シアンティフィックは大いに参考になる点がある。

(注)

トリガー6月別冊、1987、日刊工業新聞社